

UU ユー・ユー・ナウ now



OB. OG. INTERVIEW

常に可能性とチャンスがある

株式会社 JVCケンウッド 執行役員常務

落合 信夫

CONTENTS

- 1 OB. OG. INTERVIEW
- 4 特集 「HANDSプロジェクト」
- 6 地域貢献REPORT
- 8 Welcome to 授業
- 9 Welcome to 研究室&ゼミ
- 10 研究keyword / 私の学生時代
- 12 UU News / サークル紹介
- 14 宇大生は今!
- 15 INFORMATION

常に可能性とチャンスがある

いまから40年前、「ものづくりの国」として日本がまさに世界に飛躍していった時代は、宇都宮大学で工学を学ぶ学生として過ごした。新進気鋭の教授たちとの刺激的なふれあいのなかで、ものづくりの魅力を知り、世界とのつながりを意識するようになっていった。日本から海外へ、世界を舞台にもものづくりのキャリアは、ここから始まる。

(取材/工学研究科1年・高葉悠 工学部4年・木村理紗子)

ものづくりの魅力を伝えたい

「開発して、製造し、商談をまとめてお客様に使っていただく。その一連の仕事ができることが最高の喜びです」。事業責任者として開発を手がけた最新鋭のカメラを前に笑顔を見せる。直接、米国に出向き、大きな商談を成立させた。「私にとって、このカメラは自分の子どものようなもの。彼ら(米国の放送局)は、この機械の素晴らしさを理解してくれました」。

横浜本社の技術者が開発し、製造はマレーシア。米国を中心に世界の報道現場で使われている。「そういう時代になったということです。これから、ものをつくる場所も、その中身も相当変わるでしょう。いろいろなものに対応できる力が大事になってきます」。



インタビュー後、本社展示スペースで記念撮影(左から木村、落合さん、高葉)

る国、民族であれば、ものづくりはできる、そう実感させられる。

日本の高度経済成長を牽引した京浜工業地帯に立地する生産技術研究所で、エンジニアの第一歩を踏み出した。以来、半導体、電子部品などの技術開発や生産技術の改善など国内外の生産拠点の革新に携わってきた。「ものづくりひと筋にこられたことは幸せですね。日本に限らずどの国であろうと、ものづくりを求めている人たちに、これまで積み重ねて



(株)JVCケンウッド本社(横浜市)にて落合さん(右)にインタビュー

界へ飛び込んで行くということとは、その国の生活習慣やものの考え方を知り、相手の立場を理解することです」。

60歳を前にして中国への赴任が決まり一から中国語を学び、20代の若者たちと一緒に検定試験も受けた。中国・深圳(しんせん)の現地工場では通訳を介さず自ら中国語でいさつした。何千人という社員がみな、大きな拍手で応えてくれた。

恩師に出会って

「学生時代は、格好よく言えば、これから発展していく日本の工業を支える一員になる、そんな夢をみんなが持っていました」。

日本経済が飛躍的な成長を続けていた時期に、大学時代を過ごした。全国に巨大工業地帯が整備され、大学周辺にも次々と工業団地が誕生していた。「工学部の学生が世の中

きたノウハウや、ものづくりの楽しさ大変さを伝えていきたい。そして自分も彼らから学びたいと思えます」。

コミュニケーション力を支えた語学

ものづくりの変遷とともに、仕事の舞台は日本から世界に広がった。そのキャリアを支えたのが、語学を学ぶことで培われたコミュニケーション力だ。原点は大学時代にある。大学1年生後半のときだった。所属していたサッカー部を辞め、苦手だった英語の勉強を本格的に始めた。強い動機があったわけではない。「これからは世界中の人たちと付き合っていくことになる」。ただ漠然とした思いがあるだけだった。背中を押してくれたのが教授たちだった。



最新鋭のビデオカメラの説明を受けて実際にかついてみた

ら必要とされていることを実感できた。学生は全国から集まっていた。沖縄、九州、広島、大阪、静岡、東京、東北。全国の地方の話が聞けることが楽しかった。

後に宇都宮大学学長に就任する貴志浩三教授の研究室に所属。当時はまだ30代の若さあふれる情熱的な先生だった。学生にはいろいろなことをチャレンジさせてくれた。先生の



プロフィール 落合 信夫【おちあい・のぶお】

1947年、宇都宮市生まれ。71年、宇都宮大学工学部機械工学科卒業。(株)東芝入社。74年、英国パーミンガム大学修士卒。92年、同社生産技術研究所メカトロニクス開発センター部長。95年、同生産技術研究所所長。97年、東芝本社生産技術推進部長、99年、東芝テック(株)生産本部長。07年、東芝テック深圳社代表取締役会長。10年、日本ビクター(株)取締役。11年、(株)JVCケンウッド執行役員常務 生産・調達部長。



大学4年時、貴志研究室の仲間と(左端が落合さん)

「狭い日本で働くことだけを考える。志を大きく持って、欧米に負けない人材になれば」と、教授たちの励ましがありませんでした。毎日、英字新聞を声を出して読む。分らない単語には印をつけた。日を追うごとに印の数は減っていた。社会人4年目のとき産業革命発祥の地、英国・パーミンガム大学大学院に留学し機械工学を学んだ。本場のサッカーを楽しめたこともよき思い出だ。

「言葉は、やはりコミュニケーションの人口です。外国の言葉を学び世を歩んでいかなくてはならない」。

学外活動で鹿島臨海工業地帯を見学したときのことを鮮明に覚えている。工場が立地する前の広大な敷地が広がっていた。「これからのいるるな企業が進出し、巨大な工業地帯が誕生する。そう想像するだけで楽しい気持ちになりました」。

「当時の学生は、将来、日本は必ず世界のものづくりの中核になると本気で思っていたのです。大学の仲間には、卒業後、活躍の場を求め全国に散った」。

「いま、日本は厳しい状態にあります。でも、これから何がどう変わっていくかわからない。自分たちの力で日本をよくするんだという気概を持って、いろいろなことに挑戦してもらいたい。学生には常に可能性とチャンスがあるはずですよ」。

「内なる国際化」
に向き合う

田巻 松雄
国際学部教授
HANDSプロジェクト代表
国際学部附属多文化公共圏センター
副センター長



外国につながる子どもたちの増加、日本への定住化が進む中、教育や不就業などの問題への対応を学校現場だけに任せていていいのか、大学として何かできないのか、そういう視点からこのプロジェクトがスタートしました。調査・研究をベースにしながら、直接、教育現場や地域に役立てる事業を展開することを目指しています。また、学内外のさまざまな立場の関係者が一堂に会し幅広い視点で何をすべきか議論していくことを重視しています。「公共圏」という言葉で表される開かれた空間での議論を通じて大学の役割、貢献について考えていきたい。現在、「多言語による進学ガイダンス」、教育現場の先生のための「指導手引書」や子どもたちの自主的な学習を支援する「学習単語帳」の作成、学内外の連携強化などの事業を同時並行で進めています。

私たちはこれまで国際協力や国際貢献ということ以外に、国に向けて日本は何かできるかを考えてきました。これからは、「多文化共生」と表現される日本の中の国際化内なる国際化にさらに向き合っていく必要があります。外国につながる子どもたちの教育支援は、日本の教育全般を豊かにする課題と深くつながっています。

プロジェクト

HANDS プロジェクトは、外国につながる子どもの教育を通して、地域社会における支援体制モデルを提案します。

■「外国につながる子ども」とは？■

外国籍だけではなく
日本国籍でも日本語が母語
ではないなど、多文化な背景を
持つ子どもたちを
「外国につながる子どもたち」と表現し始めています。

キャリア形成の支援

「多言語による進学ガイダンス」

外国人の多くが日本に長く住み続けるようになり、外国につながる子どもたちの進学問題が浮上りました。学習支援の充実が要求されるのはもちろん、教育や入試制度について早い内から正確な情報を供給することも重要です。

HANDSプロジェクトでは外国につながる子どもと保護者のための、多言語による高校進学ガイダンスを開催しています。日本語の習得や各教科の学習に要する期間を考えると、多言語による進学ガイダンスへの参加は、小学校中学年から必要であるとHANDSプロジェクトでは考えています。



支援の場と直接つながる

「外国人児童生徒支援のための学生ボランティア派遣」

外国につながる子どもを応援したい学生の力を、学校現場に生かします。

県内の小中学校から寄せられる外国につながる子どもの支援要請に対し、登録のうえ研修を受けたやる気満々の学生たちを直接派遣します。支援内容は日本語指導から教科学習の補助、生活適応に関することまでさまざまです。

外国につながる子どもと一対一で対応し、子どもたちの負担を少しでも和らげることができればと願うと同時に、派遣に赴く学生にとっては新たな分野での経験が自身のキャリア形成に大いに役立つことでしょう。

■全国公立小中高등학교における日本語指導が必要な外国人児童生徒 2010年9月1日現在、28511名。
この母語別内訳は、
ポルトガル語33.2%、中国語21.6%、
フィリピン語15.3%、
スペイン語12.4%で、この4か国語で82.5%を占める。
栃木県における言語内訳は、
ポルトガル語35.9%と
スペイン語34.4%が圧倒的に多い。

未来の人材を育てる

「グローバル化と外国人児童生徒教育」

将来の教育現場を担う学生たちのために「グローバル化と外国人児童生徒教育」という授業を立ち上げました。今後、教員として学校に赴任する者にとって、外国につながる子どもへの支援について学習しておくことは大きな意義があると考えます。将来の教育者が身につけるべき新たな要素として、受講した学生からもたくさんの反響が寄せられています。

特集 宇都宮大学 HANDS プロジェクト

【文部科学省特別経費プロジェクト】

グローバル化社会に対応する人材養成と地域貢献
多文化共生社会実現に向けた外国人児童生徒教育・グローバル教育の推進

国際学部と教育学部が連携して取り組む特色あるプロジェクト

支援の基盤づくり

「外国人児童生徒教育・グローバル教育推進協議会」

外国につながる子どもの支援に関する学校現場の共通理解や体制づくりを目的として運営されています。構成メンバーは県教委の担当者、外国につながる児童生徒が多く就学する9市1町（宇都宮市、小山市、真岡市、佐野市、大田原市、足利市、栃木市、鹿沼市、那須塩原市、壬生町）の小中学校長先生の代表と、教育委員会の担当者です。学校管理者の視点で、外国につながる子どもの教育についてこのように全体的な話し合いがされるのは、全国的に見てもほとんど例がありません。



支援者の体力づくり

「外国人児童生徒支援会議」

毎年、県内およそ40の小中学校が「外国人児童生徒教育拠点校」に指定され、担当教員が配置されていますが、担当者の多くは外国につながる子どもの教育経験が少なく、現場に対応するための研修制度が十分でないという実態があります。外国人児童生徒支援会議は、経験豊かなベテランのスキルを共有すると同時に、共通の課題について協議を深める相互研究の場として年3回開催されています。その成果は「非拠点校」と呼ばれる、担当教員のいない学校での支援に活用されることも目的としています。

幅広いネットワークづくり

「だいたいぶnet」

外国につながる子どもを支援するすべての人が情報を交換し、相互に研修できる場を目的としたホームページ「だいたいぶnet」を開設しました。外国につながる子どもの教育に関する疑問や悩みを問い合わせフォームから送信すれば、経験豊かな指導者によって回答するという画期的な取り組みもしています。そのほか資料ダウンロードページからは「教員必携外国につながる子どもの教育Q&A・翻訳資料」の資料などがダウンロードできます。

<http://www.djb.utsunomiya-u.jp/>



地域への発信と相互交流

「フォーラム」の開催

HANDSプロジェクトは定期的にフォーラムを開催し研究と支援の成果を報告すると共に、地域の幅広い層の方々から意見を吸収し活動に生かしています。HANDSプロジェクトの前身とも言える「宇都宮大学特定重点推進研究」からすでに6回を迎え、これまでに栃木県内の外国につながる子どもの教育に関する調査研究発表や、外部関係者を交えた協議を重ね、地域の生のニーズを把握しています。これからも栃木県の現状に即した支援を提供し続けます。

「教員必携 外国につながる子どもの教育Q&A・翻訳資料」

小中学校で外国につながる子どもの支援にあたる教員にとって、生活適応から進路相談に至るまで疑問や悩みは尽きません。本書はそのような教員を応援する指導の手引きです。使いやすさを第一に考えた内容は、年間行事順に配置されたQ&Aから翻訳資料まで、必要最小限の情報が一冊に凝縮されています。



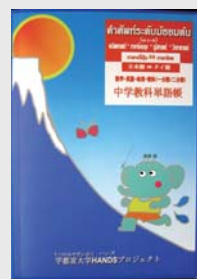
「HANDS next」

HANDSプロジェクトが年4回発行しているニュースレターです。HANDSプロジェクト事業の報告やスタッフによる関連記事、行事の案内などを収録し、栃木県内の全小中高등학교や教育委員会、自治体の国際交流協会などに配布しています。これからもHANDSプロジェクトの成果や地域に即した情報を発信し続けます。



「日本語-タイ語 中学学習単語帳」

外国につながる子どもたちの学習活動では、学習用語の多様さが大きな壁となります。「日本語-タイ語中学学習単語帳」は中学校での自主的な学習活動を支援し、進路に向けた目標づくりの手助けをすることで同時に、授業者の負担も大きく軽減します。今後はスペイン語版やポルトガル語版の刊行を計画しています。



国際化の視点をきちんと
位置づけた教育

松本敏
教育学部附属
教育実践総合センター
地域連携部門
（スクールサポートセンター）



教育委員会との連携や学生ボランティアの派遣など教育学部附属スクールサポートセンターの仕組みやノウハウを生かし、教育学部と国際学部が連携して取り組む初めてのプロジェクトです。

外国につながる子どもたちを支援するボランティア派遣は、教育学部に限定せず対象を全学部の学生に広げました。「グローバル化と外国人児童生徒教育」の授業は、国際化の視点をきちんと位置づけ、外国につながる子どもの問題を理解した教員の養成が目的です。

外国での仕事を希望する学生にも役立つ内容で、今年度は受講生が大幅に増加し、予定していた教室に収容しきれないほどです。学生のニーズが高いことがわかりました。

外国につながる子どもたちの教育についても、教員一人ひとりがしっかりとした視点、考えを持っていくことができない。教員の役割は大きいと考えます。

HANDS プロジェクトメンバー



上原 秀一 教育学部准教授
酒見 廣志 教育学部附属教育実践総合センター 地域連携部門客員教授・スクールサポートセンターコーディネーター
丸山 剛史 教育学部准教授
辻 猛司 スクールサポートセンター コーディネーター

HANDS プロジェクトメンバー



重田 康博 国際学部教授
国際学部附属多文化公共圏センター長
若林 秀樹 国際学部特任准教授
スエヨシ アナ 国際学部講師・国際学部 附属多文化公共圏センター員
坂本文子 国際学研究所 後期課程・国際学部附属多文化公共圏センター員
船山 千恵 HANDS プロジェクト コーディネーター



プロジェクト会議

宇都宮大学農学部
アグリ支援機構



宇都宮大学農学部
評議員
岩淵 和則 教授

アグリ支援機構は、宇都宮高等農林学校の創設以来約90年に渡って培ってきた教育・研究の成果、実績を社会に還元し、地域に貢献するために7年前に発足しました。アグリ支援機構は特別な施設や専門スタッフが備えられた組織ではなく、宇都宮大学農学部と同一の組織です。かねてより大学に対して敷居が高いと感じる市民が多いことから、少しでも壁を取り払い、アクセスを容易にするべく農学部の「もう一つの顔」を用意した次第です。自身は農学部ですが、地域貢献に特化、機能化した場合の「呼称」と理解頂ければと思います。

宇都宮大学農学部は、農・林・水産、生命、環境、生態などの広範な領域をカバーしており、多面的かつ総合的な知識をもって市民、農林水産業者、企業そして行政機関の皆様に対応する必要性があります。また公開講座や小中高生への出張授業を通じて、「農」についての教育や学び支援も必要です。世話役として岩淵和則、田坂聡明、関本均、松英恵吾、柏寄勝の5名の教員と農学部総務係の熊谷直子が、精一杯の対応をさせて頂きまますので、何でも相談、何でも支援の窓口として、気軽にご利用頂ければと思います。

ここではアグリ支援機構の地域貢献事例として「アグリカレッジ」、「栃木県との研究連携」そして「放射性物質低減化活動」を紹介します。

アグリカレッジ

大学教員が出向いて授業を行う、いわゆる出張授業は高校あるいは自治体などの要請に応じて年間通じて行っています。アグリカレッジは、高校生向けの夏休みや土曜日などを使った大学での集中講座であり、平成16年に宇都宮大学農学部と栃木県農業関連高校校長会との高大連携事業の一部として始まりました。講座立ち上げには、次のような背景がありました。農業・食料に関する科学分野の進展とともに、生産・加工・消費・循環を一連の体系として知識



アグリカレッジ開講式（平成22年度）

を深めることの重要性が増していますが、農業関連高校の授業科目の多くは、科学知識をベースにしながらも、その応用面・実践面の技術習得に重点が置かれています。従って高校生にとっては、日常に履修する科目が多く、実践的な実習を多くこなすことに追われ、その背景となる科学的要素、またはその面白さを一連の体系として学ぶことは難しい状況にあります。本講座では、このような状況を補うため、農業を学ぶ高校生に彼らが向き合っている科目の科学的深さ、また高校では体験できない科学を、一線の研究者である大学教員が講義と実験などを通して提供するものです。毎年6月～9月にかけて毎週土曜日に9～12時の間開講され、通算10～12回行いますのでかなり講義内容も豊富です。担当は各教員が交代で行っています。講座修了時には修了証書が授与され、高校の単位の一部にも認定されます。平成23年度で8回生を輩出し、修了生の総数は250余名と多くの高校生が巣立っています。今後も益々講座は充実される

品、林業、経営、地域環境工学）に分かれ、各分科会リーダーが世話役となり、重点研究の成果発表や研究のニーズとシーズを探るための研究課題の紹介などが行われました。以来、研究プロジェクトグループを設置し、具体的に共同研究を開始する等の活動が始まりました。特に野生鳥獣害対策研究には、日光山系での総合的な調査研究の必要性から群馬県にも研究交流に参加頂くなど活動範囲を積極的に広げて参りました。また企業との共同研究支援のために宇都宮大学地域共生研究開発センターにも協力を頂き、産官学研究交流を活発に展開しました。

このような取り組みを重ねた結果、平成22年3月には栃木県の農業試験場、水産試験場、県央家畜保健衛生所、畜産試験場、酪農試験場、林業センター場、県民の森管理事務所（名称は当時のまま）の7つの機関と農学部と共同研究や人材育成に関する連携協定書を取り交しました。学術・研究情報交流、共同研究、試験機器などの相互利用、人材育成の分野において、これまでの交流をさらに発展させ、県の農業発展に貢献することを目指しています。

地域と連携した
放射性物質汚染の低減化

栃木県は首都圏に農産物を出荷する農業県です。今回の原発事故により放出された放射性物質は、栃木県

内にかかり飛散し、農耕地が広く汚染されました。このため、3月のホウレンソウなどの汚染に始まり、腐葉土をはじめとした肥料への混入問題、汚染稲わらと牛肉問題、など多くの問題点が噴出しています。

この放射性物質の汚染は、物質循環の中に深く広がったために問題が深刻化し、すぐに解決できるものではなく、今後数年間にわたる中長期的対応を迫られています。そこで、農・食・環境における放射性物質の循環を断ち切る技術対策を確立するために、まずその基礎データとなる県内40ヶ所の農耕地の放射線量について、この6月に栃木県農政課と宇都宮大学農学部・バイオサイエンス教育研究センターが協力して測定しました。この測定活動は、農林水産省が8月30日に発表した「農地土壌の放射性物質濃度分布図」の作成に一役買っています。

さらに栃木県農政課と農学部は「栃木県放射性物質対策農業技術委員会（委員長は農政部長、副委員長が農学部長）」を立ち上げ、7月8日に第1回の会合を持ち、栃木県内の農業関連放射性物質問題の現状



学校の放射線量測定と除染活動

分析や対応策について検討しています。この委員会では耕種・畜産・土壌の3専門部会に分かれて、それぞれの専門家が農業関連の放射性物質に対する技術対策を協議および調査しています。

一方、このような放射性物質による汚染は農耕地だけでなく、あらゆる生活環境に広がっています。特に学校関係では子供への影響が懸念されているので、栃木県北部の空間放射線量が1マイクロシーベルト以上の学校については、校庭の汚染土除去が行われています。宇都宮大学ではバイオサイエンス教育研究センター・教育学部・農学部が協力して、学校での放射線量を測定し、マイクロホットスポットとよばれる放射性物質が濃縮・蓄積している特異的な場所を学校内で見つけて、その汚染土壌を除去する活動を実施していま

ます。今後とも益々講座は充実される

栃木県と宇都宮大との連携による農業試験研究促進事業

栃木県の農業試験研究機関と宇都宮大学農学部がこれまで蓄積してきた科学的・技術的成果を、栃木県の特徴を活かした農林業・産業に関わる技術の創生や諸問題の解決を図るために一層有効に活用し、より効果的効率的な共同・連携試験研究を行うことを目的として平成16年度より栃木県の試験研究機関と宇都宮大学農学部との研究交流会を毎年定期的に行っています。

第1回の研究交流会は平成16年7月に開催され、両機関合わせて総勢100名を超える参加者で、9つの分科会（作物、園芸、土壌肥料、病理昆虫、畜産、食



協定締結の調印式（写真右：茅野基治郎農学部長）

農学部は2012年に90周年を迎えます

宇都宮大学農学部は、前身である宇都宮高等農林学校が大正11年（1922年）10月21日に創設されて以来、平成24年（2012年）で90年になります。初代校長佐藤義長氏は、建学に当たり「其研究と教育とは、極めて真面目でなくてはならぬ、堅実ではなくてはならぬ、彼の浮華軽佻にして、時弊に阿諛する学風の如きは、敵に之を戒めなくてはならぬ。」（『宇都宮大学農学部60年史』より）と述べています。

以来、骨太の研究、教育を忘れることなく、現場から発想し、現場に貢献する農学の創造をモットーとして、高い専門性、実践力、倫理観と豊かな人間力を身につけ、社会の持続的発展や自然と人間・社会との共生に貢献し、未来を切り拓く魅力ある人材を養成しています。

宇都宮大学農学部が90周年を迎えるにあたり、幅広い現場で着実に重ねられて来た実績や、未来に向かって改めて伝統を踏まえながら地域との連携を深め発展していくメッセージを発信し、宇都宮大学農学部への愛着の醸成を広く図るため、2012年10月27日（土曜）には90周年記念事業として、ホームカミング、記念講演、式典、祝賀会を開催する予定です。

これから1年間農学部は様々な広報活動を展開します。楽しみにしててください。

ゼミ概要

障害児心理学 / 重複障害教育
 障害状況にある人との教育的係わり合いについて、実践研究（アクション・リサーチ）を行なっています。障害の種類や年齢は問いません。教育相談の場や学校、施設、家庭などを訪問するなかで、定期的、継続的に係わり合いを持たせていただき、障害状況からの立ち直りを目指してアプローチします。学生もこのプロセスに積極的に関与していきます。



特別支援教育講座

岡澤研究室【教育学部】

ゼミ生から

岡澤研究室では、障害のある子どもの教育相談を行なっています。岡澤先生と子どもとの一対一の係わり合いの様子を学生がビデオで記録し、授業などの際に意見を交換しながら障害のある子どもとの係わり合いについての検討をしています。私は現在、教育相談で大学に訪れている子どもと個別に係わり合いを持たせていただいている。日々どうすれば滞りの少ないコミュニケーションを行なうことができるのか、どうすれば子どもの興味を引き出して楽しい活動ができるのかということを考えながら、係わり合いを行なっています。ゼミでは係わり合いの様子を紹介しながら、係わり手のあり方や子どもの行動の意味などを学生と先生がざっくばらんにディスカッションし、お互いの考えを深めています。学生が主体的に学ぼうと切磋琢磨する活気あふれる研究室です。

大学院 教育学研究科 特別支援教育専修1年 藤島 生

岡澤ゼミでは、障害のある人々と自分はどう係わっていくのか、なぜ係わるのかということ突き詰めて考えていきます。週に1回のゼミ発表では、いろいろな人の意見を聞きながら考えを深められる有意義な時間になっています。また、ゼミ以外でも教育相談のビデオ撮影、栃



木県はもちろんのこと県外で行われる講演会の参加、ボランティアの募集などなどさまざまな機会が学生に開かれています。月に1回、宮城県に住んでいる重度の障害のある方々との係わり合いの場に行かせてもらうこともあるんですよ～！そこでは、文字学習をしているのですが、その方の視線からどちらの答えを選んでいいのかを私たちが読み取ります。問題に正解すれば一緒に喜んだり、間違いがあればどこで間違えたのかを考えたり、私たちの読み取り方はどうだったのかを考えたり...毎回勉強になることばかりです！

やるべきことはちゃんとやる、そして飲み会もしっかりやる、岡澤ゼミはそんなゼミです（^ - ^）

教育学部 特別支援教育専攻4年 三條 美紀

教員から

研究テーマは、学生が各々、主体的に設定しますが、実践研究を希望する学生が少なくありません。学生は、私が実施する教育相談に参加したり、学校や施設、家庭などの研究フィールドを訪問したりするなかで、障害状況にある人との教育的係わり合いをイニシアチブをもって展開していきます。また、研究室の学生には教育相談のビデオ撮影を担当してもらい、ビデオ記録を視聴しながらカンファレンスを実施します。ビデオ撮影を経験するなかで、観察や実践の視点について体験的に学びます。人と人との係わり合いに“正解”はありません。“よりよい係わり合いのあり方”について、自らのあり方を含めて根本的に問い直し、自らの“答え”を見出し続けていくことが“教育”を仕事とする人間に求められるのではないのでしょうか。実践研究のなかでこうしたことを学んでほしいと思っています。

教育学部 特別支援教育講座 准教授 岡澤 慎一



人間の生活を守るための学問

測量学実習【工学部建設学科】

教員から

工学部では、実験や実習を中心に、班単位で活動しながら履修する科目がたくさんあります。この科目は、建設工学コースの学生にとって、同じコースの学生同士で班になって履修する最初の必修科目です。共同作業を通じて、測量の技術だけでなく、班のメンバー同士で思いやり、助け合う技術を体得することも重要な目標です。

測量では、角度や距離、高さを計測することが基本となります。数十メートル離れた杭までの距離や高さをミリメートル単位で計測したり、角度を10秒（1度 = 60分 = 3600秒）の単位まで計測します。最近ではレー



ザーを用いて簡単に角度や距離を計測し、計算まで行ってくれる便利で高価な機器がありますが、授業ではあえて古いタイプの道具を用い、共同作業による計測技術を実践を通じて学習しています。

夏休みの合宿は天候との闘いです。天気が良ければ、炎天下で熱中症に気を付けながらの作業ですし、雨が降ってしまうと屋外での作業が困難になります。建設工学は自然に手を加えて生きている我々人間の生活を守るための学問ですから、このような自然の厳しさと対峙し、自らの作業をマネジメントしていく経験は大切だと思います。

担当：阪田 和哉（工学研究科講師）、青木 達也（工学部技術部）吉直 卓也（工学部技術部）TAの大学院生5名

学生から

大学院に進学し、4月から測量学実習のTAを担当することになりました。学部の2年生のころは、初めて扱う測量機器や慣れない作業に戸惑い、教員やTAの指示にただついていくことだけで精一杯でした。しかし、今回は自分がTAとして教える立場となり、授業前には事前準備として作業内容や手順を理解しておかなければなりません。教えることの難しさとともに、改めて測量を理解しその大切さを知る良い機会となったと思います。

大学院 工学研究科 地球環境デザイン学専攻1年 阪路 英史

私は測量学実習を通して、測量に関して学ぶだけでなく、班のメンバーとの交流も深めることができました。専門的な機器を使うので、その操作方法を覚えたりすることは大変でしたが、非常に貴重な体験になったと思います。夏休みには3泊4日の実習合宿があり、班で協力して毎日楽しく実習に取り組むことができ、良い思い出となりました。

工学部 建設学科 建設工学コース2年 亀田 俊



授業概要

この科目では、測量の基本技術の習得を通じて、応用能力や実行力、計画的かつ継続的に学習を進めていく能力を身に付けることを目的としています。

6～7名程度の班に分かれて、前期には、陽東キャンパス内の建物周辺の測量を行い、地図を作成します。

夏休みには、3泊4日の合宿形式（最近では農学部附属農場にてお世話になっています）で、道路設計のための路線測量を実施します。

対象：工学部建設学科建設工学コース2年次（実習、必修、通年、3単位）

研究 Keyword

「面白い形の有機化合物」から「塗る太陽電池」へ

宇都宮大学大学院工学研究科助教 伊藤 智志

uu laboratory

有機太陽電池について

現在、幅広く用いられているケイ素系太陽電池のモジュール変換効率は市販品で13〜18%と、現状では有機太陽電池よりもはるかに優れています。しかし、原料となる高純度ケイ素(99.9999%以上・7N)を得るためには、(1)「大量のエネルギー(主に電力)消費を要する」、(2)「工場建設に数千億円程度の設備投資が必要」、(3)「製造の際に二酸化炭素が大量に発生」などの大きな問題があります。従って、家庭用太陽光発電システムの価格が1500〜200万円程度と非常に高価なものとなり、普及という観点からも改善の余地があります。さらに、重くて柔軟性に乏しいなどの欠点もあり、設置できる場所に大きな制約がありました。その点、有機太陽電池は無機太陽電池と比較すると、発電効率や耐久性では劣るものの、原料が安価な石油から合成できるという無機系太陽電池にはないメリットがあり、盛んに研究・開発が行われてきました。今回ご紹介する「塗る太陽電池」は他の有機系太陽電池と比較しても、(1)「印刷あるいは塗布で太陽電池

が作成できるので、高価な装置(真空蒸着装置)が必要ない」、(2)「電解液が不要(液漏れなし)」、(3)「発電効率が低い」、(4)「高耐久性、など数々の優れた点があります。」

「塗る太陽電池」の作成法と用途

「塗る太陽電池」の作成の原理は極めてシンプルです。基盤上に可溶前駆体(絶縁体・赤紫色)を塗った後に160℃程度で加熱することで、テトラベンゾポルフィン(p型半導体・緑色)に変換します。その際n型半導体のフルーレン誘導体(サッカーボール分子の一種)や封止剤なども同時に塗布します。

このようにして得られた太陽電池の発電効率は年々向上し、現在のところ有機太陽電池としては最高水準のモジュール変換効率10・1%で、アモルファスシリコンを使った無機系太陽電池に肉薄するまでになりました。

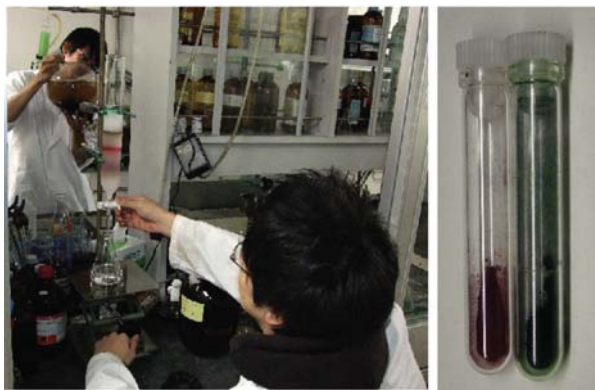
このように作成した、「塗る太陽電池」は軽くて柔軟性がありますので、従来の太陽電池では考えられない

使い道があります。例えば、自動車の車体に塗ることで「太陽光発電ができる電気自動車」、あるいは「屋根や壁全体で太陽光発電のできる建物」、「巻物のように丸めて持ち運ぶことができる太陽電池」などへの応用が期待されています。

「塗る太陽電池」を開発した三菱化学によると、2013年の初頭に市場に投入予定とのことですので、この太陽電池を使った商品が発売された時には、少々高くても真っ先に購入したいと思っています。

今後の展開

私たちの研究グループでは引き続き、「塗る太陽電池」の更なる発電効率の向上を目指して新規化合物の合



「塗る太陽電池材料」の合成(左)と実際の試料(右:加熱で茶 緑に変化)



大学院工学研究科 助教 伊藤 智志

PROFILE

愛媛大学大学院博士後期課程環境科学専攻修了、博士(理学)
専門分野:有機合成化学、新規機能性有機材料の合成研究
現在、宇都宮大学大学院工学研究科 物質環境化学専攻 超分子化学講座 助教

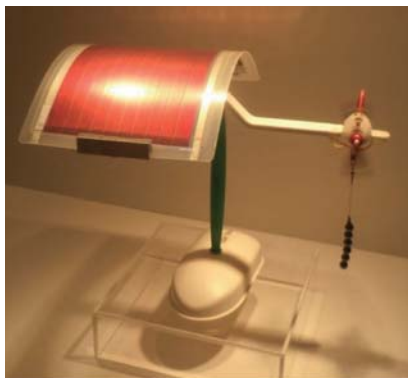
成に取り組んでいます。そのためには、(1)「太陽光に含まれる様々な波長の光を吸収できること」、(2)「半導体程度に電気を流すこと」、(3)「空气中直射日光下でも安定な有機化合物であること」、の3点を満たす必要があります。この条件を満たす有機化合物を見出すことは大変に難しいことですが、我々のミッションを遂行すべく、学生たちと一緒にチャレンジを続けて行きたいと思っています。そのためには、「軸をぶらさずに自分の研究テーマに専念すること(つまり「オンリーワンですね」)と「企業との共同研究(兼スポンサー)」の2点が重要であり、今後この方針で研究を進めていきたいと考えています。その過程で学生たちが有為な人材に育つことそして宇大発の新たな機能性化合物を発見が出来るとう嬉しいですね。

私の専門分野

私の専門は有機合成化学です。新しい有機化合物を考案、実際に合成して、半ば自己満足で「こんなものが出来たぞ!」と世の中に広く発信するのが私の研究であり仕事です。

今回ご紹介した「塗る太陽電池の材料(テトラベンゾポルフィンとその可溶前駆体)」も実のところ、最初から用途を想定して合成したものではありません。「形が面白い有機化合物」を合成する過程で、「塗る太陽電池」の作成で最も重要な有機化合物の合成法と反応を、私(と愛媛大宇野英満教授、小野昇名誉教授)が偶然に見出したに過ぎません。

それ以降のことは、この記事の図や写真を提供してくださった三菱化学の太陽電池PJや、東大の中村栄一教授・松尾豊教授のご尽力によるものです。私が世界で初めて合成した化合物が、見ず知らずの研究者に注目されるだけでなく、広く社会に役立つというのは合成化学者冥利につきます。



「塗る太陽電池」を使ってプロペラを回す(写真提供:三菱化学)

“偶然”が私の将来を決めた

私の人生は「偶然」の積み重ねのようなものです。

有機化学に興味を持つきっかけは、高校時代、化学の教科書にあった「ベンジル」という有機化合物の名前に出会ったことです。なぜか、その言葉の響きが面白く思えたのです。それ以来、有機化学が大好きになり、大学で有機化学を学ぼうと心に決めました。

愛媛大学時代の恩師、小野先生との出会いも、奇遇というか、不思議な縁を感じます。入学当初から指導教官として目をかけていただきましたが、1年前期の成績表を受けとりに行った際、「何を研究テーマにしたいのか」と聞かれ、「僕は有機化学1本です」と答え、先生はとても喜びました。その後、先生の研究室に所属することになりましたが、当時、所属先は、学生同士じゃんけん決めていたので、先生は「よくじゃんけんに勝ってきた」と大変お喜びになったことを記憶しています。「何をやりたいの」との問いに



博士研究員時代

「先生がやらせたいと思うテーマをください、一生懸命にやります」と答えました。それが、太陽電池につながる研究でした。

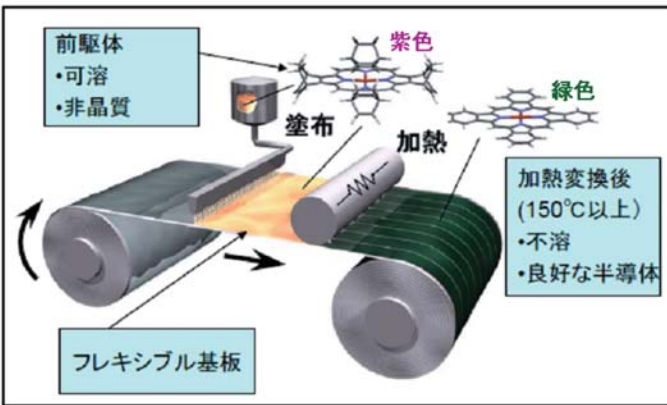
「塗る太陽電池」の作成に重要な有機化合物の合成と反応の発見も偶然でした。当時、小野先生は研究の興味の対象が別のところにあり、あまり関心を示しませんでした。宇野先生の薦めもあり論文を英国化学学会誌に投稿したところ、高い評価をいただきました。

いま、研究室の学生たちには、「ぜひ私を出し抜いて、師匠の小野先生と同じように、いい思いをさせてくれ」と話しています。人に言われたことだけをやってはだめ。自分のテーマは自らが一番詳しく知っているのですから。私を出し抜いてもいっこうにかまわないのです。小野先生とは、いまも親交があります。アポなしで突然、宇大の研究室を訪ねて来られることもあります。私にとっては仕事の上での父親のような存在です。

愛媛大学とも研究室レベルでの交流があります。いま、私の研究室の学生を愛媛大学に送り込んでいます。いろいろ面倒みてくれていると思います。

【伊藤 智志】

My Campus Life



「塗る太陽電池」の製造イメージ(図提供:三菱化学)

私の学生時代

栃木県産学官連携経営工学講座

宇都宮大学、作新学院大学、白鷗大学は、9月5日、三大学院連携で進めている栃木県産学官連携経営工学講座（MOT：Management of Technology）開講一周年を記念する式典を宇都宮大学工学部で開催しました。この式典には、栃木県の官界、産業界および三大学の教官、学生等が多数出席し、開講一周年を祝いました。式典では、福田富一栃木県知事（代読）、栃木県の経済三団体を代表して経済同友会筆頭代表幹事の板橋敏雄氏、さらに、三大学を代表して本学学長より、それぞれ挨拶がありました。

次に、光陽電気工事代表取締役社長の飯村慎一氏が「グローバル競争社会におけるMOTの重要性」と題した基調講演を行い、これからは技術経営（MOT）に基づいたオープンイノベーションによる企業革新が必要である、と締めくくりました。

この産学官の連携講座は昨秋開講し、将来の技術経営のプロフェッショナルとして活躍できる高度な専門性と経営的センスを有する人材の育成と再教育を目指したものです。昨年10月から本年7月末までに、エッセンシャルコース（社会人38名、宇大学生4名）コース（社会人29名、宇大学生12名）を開講、募集計画を上回る受講生が学習し、本年8月3日に両コースの修了式を宇都宮大学で実施しました。本年も引き続き10月からプログラム2

年目のエッセンシャルコースと新たなアドバンスコースを開講しています。



災害ボランティア第4弾

「被災地みやぎを歌で応援しよう」

宇都宮大学では、災害ボランティア第4弾としてサークル混声合唱団の37名が、9月9日（金）に南三陸町で瓦礫の撤去を行い、11日（日）には「被災地みやぎを歌で応援しよう」と題し、宮城学院女子大学の講堂にて「宇都宮大学混声合唱団サマーコンサートin仙台」を行いました。

学生たちは秋晴れの中瓦礫撤去に汗を流したあと、被災者の方々の力になればと精一杯の歌声をたくさんの曲



に込めて届けてきました。

参加した学生たちは、怪我やトラブルもなく2つのボランティアをこなし、無事大学に帰ってきました。



平成23年度「全学FDの日」開催



全教員がFDについて考える日として、平成21年度より「全学FDの日」を開催していますが、第3回となる今年度は「内部質保証を目的とした教育改善」をテーマに、9月29日に実施しました。

午前9時、9月29日に実施しました。

午前の「全学FDシンポジウム」では、進村学長の挨拶に始まり、石田理事・副学長、廣内基盤教育センター講師、岩淵農学部教授による講演が行われ、講演後の質疑応答では予定時間を超過するなど活発な意見交換が行われました。

午後の「個別FD活動」では、午前のシンポジウムを踏まえ、各学部、学科、コース等において「教育改善の取り組みとPDCAサイクルの構築」及び「教育の内部質保証」について、今後の取り組みをも含め活発な討論が行われました。農学部では、同シンポジウムにおいて紹介した試行的取り組みをポスター発表形式で全学公開したところ、学長をはじめ各学部教員が多数来場し様々な質問等が寄せられ、非常に有意義なものとなりました。



FD=ファカルティ・ディベロプメント (Faculty Development) とは、教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。出典: 文部科学省ホームページ「大学教員のファカルティディベロプメントについて」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/003/gijiroku/06102415/004.htm

先進国の飽食と途上国の飢餓を同時に解決



た。販売開始時にはイベントの一貫として「TFT党」を結成して、「TFTに清き1食を」と生協前で代表演説をして学生に周知しました。

TFTの仕組みに共感してメニューを選んでくれることはもちろんですが、ただ「美味しそうだから」と選んでくれた人が、途上国と先進国の食の不均衡を知るきっかけにもなればうれしいです。

メニューの考案のほかに、「菜食主義のすすめ」など勉強会も開いています。9月にはメンバー募集も兼ねて、アフリカの支援地を視察したTFT大学連合元代表の上村悠也さんを招き、TFTの活動が教育支援など現地でどう反映されているのか講演していただきました。

今後の目標は「TFTの認知度を字大で100%にすることです。」

代表：竹元志穂（国際学部2年）

TFT宇都宮 連絡先：tft-utsunomiya@hotmail.co.jp



TABLE FOR TWO(TFT)は、「二人の食卓」と直訳されますが、「先進国の飽食と途上国の飢餓を同時に解決すること」をコンセプトに活動しているNPO法人です。TFTメニュー1食につき20円がTFTを通じてアフリカの開発途上国の子どもの学校給食のために寄付されます。20円というのは、開発途上国の給食1食分の金額で、先進国で1食とることに開発途上国に1食が贈られるという仕組みです。

この活動には全国で80の大学が参加しています。TFT宇都宮は、昨年、宇大の学生たちで結成されました。活動は、まず、野菜を中心とした食材でカロリー控えめのヘルシーメニューを考えることから始めました。メンバーそれぞれがレシピを出し合って試作会を開き、候補メニューを大学生協に提示しました。調理担当者のアドバイスをいただき、一緒に試作を重ねながら学食で提供するメニューを決定しました。

今年5月に販売を開始した第一弾メニューは、「肉豆腐カレーあんかけ」と「鶏ごぼう丼」でした。その後、「きのこ入り肉野菜丼」と「ピピンハンバーグ丼」が加わりまし

インターカレッジ女子100メートル5位入賞

平成23年9月9日から11日にかけて、熊本県民総合運動公園陸上競技場で開催されました天皇賜盃 第80回日本学生陸上競技対校選手権大会〔インターカレッジ〕の女子100mに、本学の陸上競技部所属教育学部生涯教育課程スポーツ健康



コース4年次生 橋本奈央子さん（写真：中央）が出場し、決勝で見事5位入賞を果たしました。

高大連携バイオ実験体験講座に130名を超える応募者！

宇都宮大学バイオサイエンス教育研究センターでは、今年も高校生参加のバイオ実験体験講座を開催しました。

現在、第一線で活躍している大学の研究者と、最先端の研究成果の一端を高校生が見る・聞く・触れることで、学術と日常生活との関わりや、科学（学術）がもつ意味を理解してもらおうプログラムです。

当センターでは、遺伝子関連バイオ実験に力点を置いています。「DNAを食べたことがありますか？」に始まり実際にDNAを見て、さわることから始め、蛍光タンパク質で光る大腸菌を作る、コメのDNA鑑定などを実際に体験できます。今年には高校生と高校教員を対象にした3回の講座に合計で130名以上の応募があり大盛況でした。

また、特定の高校と連携した講座（SPPなど）も行っています。実験内容やスケジュールの詳細は、当センターのHPに掲載しています。



<http://c-bio.mine.utsunomiya-u.ac.jp/>

附属図書館 - 企画展 -

「3.11後」の今、地震の歴史と向き合う

幾度もの震災を乗り越えてきた日本の歴史を、図書館所蔵資料と共に振り返る企画展です。

栃木の地震の記録や、東日本大震災関連図書も展示いたします。

日程：11月1日(火)～12月27日(火)
平日：9時～20時 土日祝：11時～17時

観覧自由

11月21日(月) 22日(火)
と最終日は17時まで
会場：宇都宮大学附属図書館 3階
(峰キャンパス内)
問い合わせ先：附属図書館
TEL：028-649-5133



「安政大地震絵」(国立国会図書館ウェブサイトより)

しもつけバイオクラスター第7回フォーラム

このフォーラムでは餃子とご飯の相性や、おいしい餃子あれこれなど餃子の作り方、食べ方などを料理専門家から、また餃子の健康機能成分について大学の研究者から話題提供します。

さらに「宇都宮餃子のさらなる振興をめざして」というテーマで餃子にかかわってこられた専門家によるパネルディスカッションを行います。宇都宮の産業、観光と餃子業界の結びつきを強めてより大きな宇都宮餃子の発展方向を模索します。

会場からの発言も歓迎しますのでふるってご参加ください。餃子の試食会もあります。

日時：11月11日(金) 14:00～17:30

入場無料

場所：宇都宮大学峰キャンパス 大会堂

問い合わせ先：宇都宮大学しもつけバイオクラスター事務局
TEL：028-689-7139 FAX：028-689-6327

だいこんサミット2011

今年で8目を迎えるだいこんサミット2011では、京都市の聖護院ダイコンや日本の春ダイコンの栽培の現状、長野県坂城町のねぎみ大根振興会の取り組み、日野市東光寺干しダイコンと飛騨市寒干しダイコンの生産の取り組みなど、現地のレポートに基づき、地域のダイコンの話題を混ぜながら日本のダイコン文化を考えます。是非ご参加下さい。

日程：11月26日(土) 13:00～17:50

参加無料

場所：宇都宮大学峰キャンパス内峰ヶ丘講堂

問い合わせ先：だいこんサミット2011実行委員会(房 相祐准教授)
TEL：028-649-5448

平成24年度入試日程

- 推薦入試 (農学部・農薬環境工学科) 大学入試センター試験を課す。
出願1/16～20、試験2/3、合格発表2/6
- 一般入試
出願1/23～2/1 大学入試センター試験1/14～15
前期試験2/25、合格発表3/6 後期試験3/12、合格発表3/20
問い合わせ先：入試課 TEL：028-649-5112

第63回峰ヶ丘祭〔学生主催〕

今年で63回目を迎える大学祭〔峰ヶ丘祭〕は、屋内での学生の成果発表の展示、各種模擬店の他、屋外ステージにて芸能人、音楽・ダンスサークルによるライブや各種イベントを予定しています。

日程：11月19日(土)～21日(月) 10:00開始

会場：宇都宮大学峰キャンパス

【駐車場に限りがありますのでなるべく公共交通機関をご利用ください】

問い合わせ先：宇都宮大学大学祭実行委員会 TEL：028-634-5877



オープンキャンパス

国際学部

日程：11月19日(土) 場所：宇都宮大学峰キャンパス 国際学部A棟
内容：学生による相談コーナー、教員による相談コーナー、学生紹介ビデオ鑑賞コーナー、学部関連資料閲覧コーナー

問い合わせ先：国際学部総務係 TEL：028-649-5164

入退場自由・大学祭との同時開催です。

詳細はホームページをご覧ください。http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/

工学部

日程：11月13日(日) 場所：宇都宮大学陽東キャンパス

内容：理工系進学フェア、講演会(受験生・保護者対象)、模擬授業、研究室案内、入試相談、他

問い合わせ先：工学部総務係 TEL：028-689-6005

事前予約不要・入退場自由 http://www.eng.utsunomiya-u.ac.jp/

農学部

日程：12月17日(土) 場所：宇都宮大学峰キャンパス

内容：模擬授業、学部説明会、進学相談、他

問い合わせ先：農学部総務係 TEL：028-649-5398

http://agri.mine.utsunomiya-u.ac.jp/

これからの野生鳥獣管理を考えるフォーラム

行政と県民、専門家の連携によるシカやイノシシなどの**農林業被害対策のあり方**について、講演やパネルディスカッションなどを行います。

日時：11月27日(日) 10:30～17:00

入場無料

場所：宇都宮大学農学部3101教室

プログラム

- ・「鳥獣対策における行政の役割 平田滋樹(長崎県農政課鳥獣対策専門員)
- ・「野生動物管理システムの構築に向けての課題と展望」 梶光一(東京農工大学教授)

・パネルディスカッション

上記講演者、宇都宮大学教員、鳥獣管理士、集落代表者、行政関係者

・里山野生鳥獣管理技術者養成プログラムや、獣害対策モデル地区の取組紹介
主催：栃木県・鳥獣管理技術協会・宇都宮大学農学部附属里山科学センター
共催：東京農工大学

問い合わせ先：栃木県自然環境課 TEL：028-623-3261(申込不要)

UU now 第26号 企画・編集

企画広報課では、皆さまの声をお待ちしております。

ご意見・ご要望などをお寄せください。

【宛先】宇都宮大学 企画広報課

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350

TEL 028-649-8649 FAX 028-649-5026

URL: http://www.utsunomiya-u.ac.jp

E-mail: plan@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp



宇都宮大学
携帯サイトへGO!

編集協力
栃木文化社
ヒオス編集室

企画・広報担当

発行責任者

直樹 幸博

渡邊 直樹

大田 幸博

茂田 耕二

菊田 浩二

大木 隆文

清澤 和文

岡村 隆文

古村 賢一

木村 賢一

高木 悠生

藤野 悠生

野々村 拓真

岩上 知可

木村 理沙

森 沙真

金井 真和

中村 和規

編集委員

宇都宮大学

UU now 第26号 編集委員

震災ボランティアに参加して

今回は、東日本大震災復興支援のためにボランティアを行った学生の皆さんの感想を紹介します。

宇大生は 住まわす

今年の7月16日から18日までの3日間で、私たちは宇都宮大学生のべ120名と共に宮城県石巻市での復興支援活動を行いました。内容は家屋の庭に堆積した瓦礫を撤去する作業でした。私たちの携わった地域は、津波により地形さえも変わってしまい、震災後も連絡橋の崩壊でしばらく立ち入ることのできなかった地域でした。復興支援活動の進行度も、地域によっては未だ手付かずに近い状態で放置されている現状を改めて思い知らされた気分です。3日間の活動を終えてもまだ片付けきれない瓦礫を前にして、達成感よりも無力感の方が強くこみ上げた記憶があります。同時に、やはり復興支援は必要な存在であり、これからも続けていくべきだと実感させられました。

国際学部4年

自分は、5月2日に大学のボランティアバスで石巻へ行き、現場の惨状を見てとても衝撃を受けました。そこは、今まで見たこともない光景であふれており、自分にも何かできることはないのかと考えるきっかけになりました。その後、宇都宮大学のメンバーと石巻へもう一度ボランティアバスの派遣を行いました。けれども震災の影響はまだ残っており、自分にできることを探すために、夏休みを利用して、他団体の行っているボランティアに参加しました。そこでさまざまな学生と出会い、彼らがさまざまな思いを持っていることを知りました。そして、現在は彼らをつなぐ場をつくり、共に支援の形を考えていきたいと思っています。

国際学部1年

3月11日の震災後、私の周りには家を失い、深く傷つきながらも明るく振舞う友人がたくさんいました。私は彼らや地元の人々の東北の力に少しでもなりたいという思いで震災ボランティアに参加しました。自分が想像した以上に実際の被災地の被害はひどく、以前のような街に戻るのには相当な時間と支援が必要だと身に染みて感じました。しかし、ボランティア活動に参加し被害に遭われた被災者と触れ合う中で、苦しみながらも必死に頑張ろうとする姿や笑顔に、自然と自分も頑張ろうという力をいただきました。また故郷を大切にしようという心も学んだような気がします。今後も長く復興支援に携わっていきたいと思います。

国際学部2年



石巻で数日、泥出しや清掃、瓦礫の仕分けなどのボランティア活動を行った。ゴールデンウィークが最初の活動だったが、約2ヶ月後に再び現地へ行って、時間は経ってもまだまだ手付かずの地域があることに驚いた。日は高くても活動できる時間でも、満ちる潮で海水が側溝からしみ出してくるため、活動を終了しなければならないこともあった。また、もし地震や津波が起こったときの避難方法、経路なども考えつつ、暑さによる脱水や熱中症など自分自身の健康に気を付け、現地に迷惑がからないように活動することの大切さも強く感じた。まだまだ現地のために役に立てることはたくさんあると思う。これからも現地へ行って活動を続けたいと考えている。

教育学研究科2年

今まで、私が被災地に行ってボランティア活動に参加したのはまだ2回です。ですがそれはとても濃密なものでした。作業をするにあたって現地の方とお話する機会があったのですが、その際私たちに気づいて、時折差し入れをいただくなど、本当にあたたかく接してくれたのを覚えています。最後に、「ありがとうございます」の言葉をいただいたときには、これを続けていかなければならないと強く思いました。そして、困難な状況にあっても強く優しくたくましい彼らを見て、自分も恥ずかしい生き方はできないと思ったのです。たった2回の活動でも、行ったことに意味はあったと考えています。繰り返しになりますが、あとはこれを続けていきたいです。

農学部3年

宮城出身なので、石巻や仙台の海沿いの地区で主に瓦礫撤去や瓦礫が埋まった畑の整備などを行いました。地元仙台で活動した際に被災者の方々のお話をたくさん伺うことができ、半年経った今でも決して震災は終わった訳ではないということに改めて感じました。月日が経つうちに求められるボランティアの形は変化していきますが、人手は足りておらず、復興はまだこれからだということに変わりはありません。今求められている支援は何なのかということを正確に把握し、今後も継続してボランティア活動に関わっていきたいです。一時だけ盛り上がることは無関心というような、震災をイベント化させることは絶対に避けたいと考えています。

国際学部2年

今回の震災は、地震に始まり、津波、火災、そして原発問題という甚大かつ複合的な災害であり、被災地が抱える問題も多種多様である。私は3月より道路の瓦礫処理、家屋の片付け、炊き出し、仮設住宅運営等のボランティアとして関わってきた。半年経った今、被災地や被災者のニーズは徐々に変化していることを痛感している。ボランティア活動をすると、私たちは自分たちが「ボランティア」であるという自覚の前に、一度立ち止まって、被災された方々が何を望み、何を必要としているのか、または被災地や仮設住宅に何が必要であるのかをじっくり見極めることが重要であろう。決して、「まずボランティア有り」の活動であってはならない。

国際学部4年



私は、7月の宇都宮大学生が宇都宮大学生を、震災で被害を受けた石巻に派遣するという震災ボランティアに関わらせていただきました。私自身はこのプロジェクトに途中から参加し、現地へ足を運んだことはありませんでした。ですが、被災地へ足を運んだことのあるメンバーの熱意を感じました。私は、参加者の視点からアイデアを出したり、簡単なことしかできませんでしたが、当日は、受付と出迎えました。送り出しと送り迎えの参加者の表情は疲れの中にも達成感や悲しみなど、さまざまでした。今後も私たちは、被災された方の一助になれるような活動と共に、私たち自身も何かを思い考えられるような活動をしていきたいと思っています。

国際学部2年

私は、今回のボランティアでは物資の準備や運搬、現地へ行く人たちの受付や体調管理など、主に裏方として活動に携わりました。今回の活動を通じて一番感じたことは、あらゆる場面を想定することの重要性です。「まさかこんなことは起きないだろう」と思っていたことが、現地では起きてしまう。そういったときに、その場面を想定していたか、していなかったかは精神面で大きく異なります。これはボランティア活動に限ったことではないと思います。日常生活においても、私たちの周りには危険が多く存在します。「私は大丈夫だろう」と安心せず、常に広い視野を持って場面を想定する力が必要なのだと感じました。

国際学部2年

